

「研究とは何だ！

- 新大の知性と地性 - 」



市場経済価値とそこからこぼれた価値をつなげる 新しいネットワークづくりが求められている。

普遍から具体へ 現場が大学

高度経済成長時代のド真ん中で育ってきて、大学もそのさなかにいました。そこでは「普遍的でないものは学問にあらず」と教わりました。工学部の場合、数値化できて誰でも時間や場所に関係なく分かるようにすることが重要でした。歴史や地域性などはあまり重要視されませんでした。修士時代に河川研究室にいて、ダム統合管理を研究していました。コンピューターでダムを操作して、効率的に使うという研究でした。しかし、現場を知らずにコンピューターだけの議論ではおかしいと思っていました。その後、現実の川を見て歩こうと思い、毎週のように利根川を見て歩きました。

利根川について論文を書きました。内容の半分は歴史的な内容で、工学部のドクター論文にしては数式が一つもなく、利根川という具体の川を扱っているのが普遍性

がないということで審査員から批判を浴びました。が、何とかドクターを取得できました。

そんな経緯の中で、新潟大学の職の話が舞い込みました。利根川とともに日本の大河で、ちょうど背中合わせに並ぶ信濃川について勉強できるということで勇んで新潟大学に赴きました。

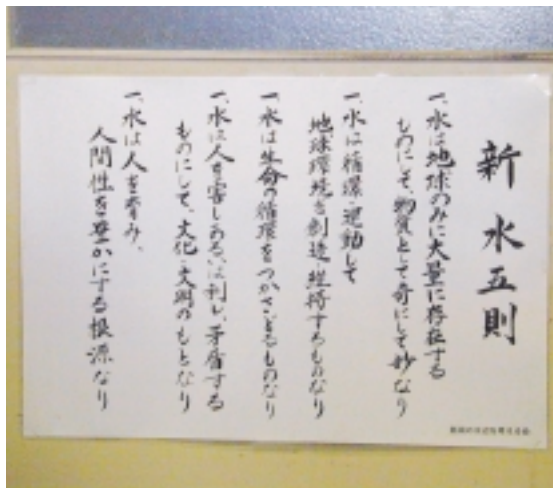
日本で一番面白い越後平野の開発史

越後平野の開発は歴史的観点からも日本で一番面白いと思います。信濃川の大河津分水の着工、中止、堰崩壊、修復など、自然と技術の発展段階との関係がダイナミックに動いてきました。

信濃川については、川沿いのすべての地域に関連したことまで知りたいという思いがありました。現在の信濃川の利用の仕方

工学部
大熊 孝 教授
(専門分野：河川工学、土木史)

利根川とともに日本の大河で、ちょうど背中合わせに並ぶ信濃川について勉強できるということで勇んで新潟大学に赴きました。



川がつくった川、
人がつくった川

著者：大熊 孝

発行：ポプラ社（1995年）



大熊孝プロフィール

大熊 孝
Takashi OKUMA

新潟大学工学部教授
NPO法人・新潟水辺の会会長

1942年生まれ。

東京大学工学部土木工学科卒業。工学博士。

研究課題 信濃川の治水の変遷 近代化土木遺産の技術的・意匠的・系譜的評価

著書：『利根川治水の変遷と水害』（単著、東大出版会、1981年）

『洪水と治水の河川史』（単著、平凡社、1988年）

『川を制した近代技術』（編、平凡社、1994年）

『市場経済を組み替える』（共著、農文協、1999年）